

変化の時代に求められる
「軸」と「修正力」

安西 生産年齢人口の減少、地域間格差、グローバル化などの問題を乗り越えるために、今後10年間で日本は大きな変化を迎えます。これまでとは異なる環境の中でも、人生をより良いものにする力をどうすれば若者たちが身に付けられるのか、教育にかかわる者全てに投げ掛けられている問いです。

喜多埜 安西先生がおっしゃる通り、人口そのものが減る中で、日本はグローバル化を進めなければ立ち行かなくなるといふことを、産業界が切迫感を持って受け止めているの

これからの10年における
変化を生き抜くために必要な力とは

今の生徒たちが5年後、10年後に社会人、職業人として生きる社会の有り様は、今と比べ大きく変化しているであろう。見通しを立てにくい社会の中で、所属する集団の中で自分の役割を果たし、より良く生きていくために必要な力について考える。

は事実です。グローバル化に対応するためには、異なる価値観の人たちと協働する力や、コミュニケーションツールとしての英語力の育成など、これまでの教育からの大きな質的転換が迫られているように思います。

山河 まずは大きく変化する社会だからこそ、それまでの正解、やり方が通用しない局面にこれまで以上に多く直面することになるでしょう。私たちのような職業人であれば、仕事の内容や働き方が大きく変わることはもはや珍しくありません。そうした変化を前にした時、会社やチームにおける自分の役割を果たしつつ、しっかりとした人生を歩き続

けるためには、柔軟に変化に対応する力、修正力が求められると思います。そして、変化する社会に漫然と流されず、変化を真正面から受け止める必要に応じて自己修正していくためには、自分の中に譲れない信念やこだわり、目標といった生きる上での軸と、それをつくる力が、これまで以上に必要になると思われます。

安西 生きる上での軸を持てるかどうかは、変化の大きな社会では、一層切実な問題になっていきます。現実には、大学に入学したけれども、大学生活の目標が持てない学生は少数ではありません。高校や大学において、若者たちが目標を自分で設定するト

レーニングの場はもっと必要でしょうし、目標をいったん決めながらも、社会の変化や自分自身の成長に応じて目標そのものを柔軟に修正する訓練も行うべきだと思います。実際、学生たちと接していても、変化に感じた修正力が不足していることを感じます。

喜多埜 私たちが高校生、大学生だった頃は、目標を持つこと自体がまだ容易だったと思います。しかし、社会がより豊かで便利になり、いろいろなものが手軽に手に入るようになって、選り好みをしなければ大學に入学するのも簡単になったことで、若い人たちがしっかりとした目標や軸を設定しづらくなりました。

そのことを私たちはもっと理解した上で、若者たちへの働き掛けを行っていくべきなのかもしれません。

軸を育む冒険を 生徒に促す社会に

山河 変化する社会に柔軟に対応するためには修正力が確かに必要ではありませんが、何よりその土台としての軸をつくりにくくなっている今、私たちに何が出来るのでしょうか。

喜多埜 目標や軸を持ちにくい社会になったのは事実ですが、その半面、その気にさえなれば大胆なチャレン



慶應義塾学事顧問
安西祐一郎 あんざい・ゆういちろう
前・慶應義塾長。文部科学省中央教育審議会大学分科会会長、教育再生懇談会座長などを歴任。

ジがしやすい社会になったと私は思っています。近年、自分で起業する若者は増えていきますし、わずか数年のうち大きく成長し、社会に大きな影響と存在感を示している企業は少なくありません。ハングリー精神は持ちづらくなったかもしれませんが、冒険が出来る選択肢は実は増えていることを、高校生にも知ってもらいたいと思いますし、高校の先方にはそうした社会の実情を知って、生徒に話していただきたいです。



ソフトバンクモバイル株式会社 常務執行役員
喜多埜裕明 きたの・ひろあき
ヤフー株式会社取締役、BBモバイル株式会社取締役などを経て、現職、株式会社UULA取締役を兼任。

ん、勉強以外のことにも挑戦し、一生懸命取り組んだ生徒を入試で評価する仕組みを大学は考えていけないといけません。今の大学入試は、大学で学ぶために必要な学力、あるいはそれ以上の学力を入試段階で測りますが、困難に向き合う力や人の気持ちを感じ取るセンスには十分に目を向けられてはいません。学びへの情熱を持った生徒をまず選抜し、その生徒に大学レベルの知識を身に付けさせるのが本場の大学の姿ではないでしょうか。教科学力以外は客観的に測りにくいのは事実ですが、主



株式会社ベネッセコーポレーション 取締役
山河健一 やまかわ・けんじ
高校事業関連の営業担当、高校事業営業本部長、高校事業部長などを経て、現職。

観的でもその分責任を持って選抜し、育てていこうという覚悟が大学には必要だと思います。企業の採用ノウハウなども学びながら、入試のあり方を考えていくべきです。

山河 今、高校現場では、多くの教師が「学力とは、人間的な成長が土台にあつてこそ、定着していくものである」と考えています。教室でも、人間的素地をつくることに多くのエネルギーが注がれていますから、高校時代につくった軸・身に付けた力を大学が責任を持って評価する仕組みが望まれますね。

高校の内外で タフな経験を積ませる

喜多埜 ソフトバンクモバイルでも、近年、グローバル化によって働き方は大きく変わっています。海外事業に携わる可能性は全社員にあると言えます。しかし、変化はそれだけではありません。ベネッセコーポレーションが介護など新しい分野に進出しているように、情報・通信業のソフトバンクも、最近では感情認識

ロボットの開発など、新しい分野に挑戦しています。そのため、今日までスマートフォンコンテンツ開発を担当していた社員が、明日からロボット開発に携わる現実が実際にあるわけです。そうした環境変化に自己修正しながら対応できるのは、やはり学び続けることが出来る人、ものの考え方を知っている人です。

山河 変化を厭わないタフな修正力は、高校時代のいろいろな体験を通して身に付けられるものでしょう。例えば、部活動や学校行事に全力を尽くした生徒が社会でタフに活躍できるのは、リーダーとフォロワーの両方を豊かに体験しながら修正力の素地を培ったからだと考えられます。

安西 これまでにもあったそうした教育の場を大切にすることで、今後は、高校という枠から離れた世界に生徒を送り出すことも重要だと思います。例えば、高校生のうちに企業



「達成感と挫折感を交互に味わいながら、自分の可能性を広げる場を学校の外にもつくっていくべき」安西



「先生には、変化に向き合う楽しさ、そこから得た気付きを自分の言葉で生徒に語ってほしい」喜多埜

の現場の本当の厳しさを知ることが出来れば、彼らはタフでありたいと切望するようになるでしょう。社会で求められるタフさを持っているかどうかは、すなわち「自分からやるか、言われてやるか」の違いだと思います。高校という枠の中では教師が導いてくれますが、社会に出るとそうはいきません。自分から動くタフさが求められる場面を学校の内外にこだわらず、意図してつくること

が大切でしょう。私が理事長を務める Future Skills Project 研究会（*以下、FSP研究会）に参加する大学では、入学直後から産学協同で授業を行っています。ここでは、社会人講師にも答えが見えない問題に、初めて会ったばかりの学生が

チームになって取り組みます。そうした、自分でやるしかない状況を高校時代にもつくってほしいと思います。

山河 FSP研究会に参加する中で、私にも想定外の発見がたくさんありました。その1つが、タフなチャレンジを体験した大学生が、一般教員などの座学にも真剣に取り組むようになったことです。社会人と話し合ったり、仲間と課題について考えたりする中で、教養や背景となる知識がないと前に進まないことを実感し、学びに向き合う上での軸が出来たのでしよう。タフな体験を経て、社会は学び続ける場であるということ

を痛感したのだと思います。

異質なものと出合うほど生徒の可能性は広がる

安西 学校外の機関とも連携しながら、これまでの高校での学びとは一線を画するような異質な場面をつく

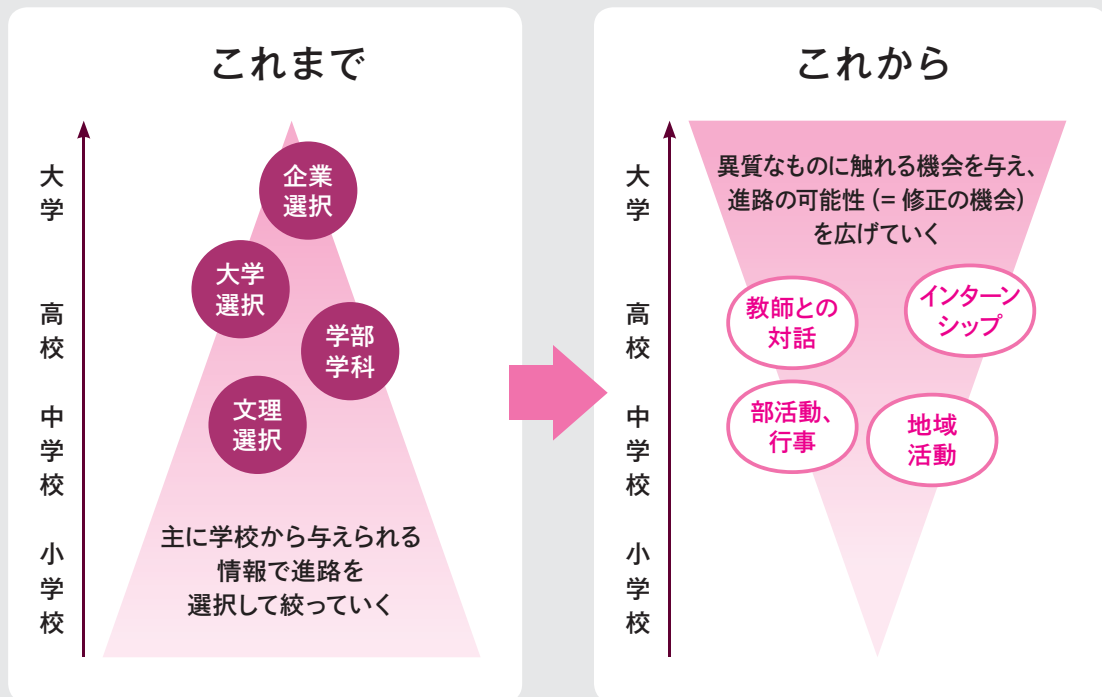
り、修正力を育むタフな体験を生徒に提供できるか。教師自身のバイタリティが問われていると思います。**喜多埜** 高校の先生が生徒以上に社会の変化を知ることが大切だと思います。だから私は、学校の先生にもインターンシップに参加してほしいと思っています。参加すれば、きっといろいろな発見があり、生徒への言葉も変わるでしょう。

山河 FSP研究会の活動も、最初は大学教育の中では異質な存在でしたが、今では少しずつ活動の輪が広がっています。きつと、変化に向き合うためには、教師が異質なものを恐れてはいけないうね。異質なものを恐れる限りは、実はそれがチャンスであっても、脅威として目に映り続けます。

喜多埜 Eコマースにしろ、インターネットオークションにしろ、最初は「そんなえたいのしれないものに参加する者なんかいない！」と皆が異質なものだと思えていました。しかし現実には、一気に広まって、大きな社会構造の変化をもたらしました。「無理だ」「違う」と目を背けるか、良いチャンスだと前向きに捉

*「社会で活躍できる人材をどのように育成すべきか」をテーマに、企業人と大学人が問題を共有し、主体性と応用力を持った学生を育てる「産学連携」や「アクティブラーニング」[PBL (課題解決型学習)] などのカリキュラムの研究・開発に取り組む。ウェブサイトは、<http://www.benesse.co.jp/univ/isp/>

進路選択の三角形を逆にして考えてみると……



年齢と共に進路が絞られていくイメージ。自分が掲げた目標を達成することが成功であり、出来るだけ描いたコースから外れないように努力をする。

年齢と共に増える経験、身に付けた知識・スキルを生かして、選択できる進路が広がることを自覚する。状況に応じて目標や目標到達手段を修正する。その際、修正するかどうかの判断の基準となる軸が必要になる。



「自分の可能性が広がっていることが分かれれば、変化を恐れず、自分を修正することが出来る」 山河

えるかで、変化の受け止め方は全く異なります。では、生徒を指導する先生は、「変化はチャンスなのだ」という気持ちを持っているでしょうか。先生が変化をチャンスと捉え、そこでの気付きや楽しさを自分の体験から生まれた言葉で生徒に語るこゝとが出来れば、先生は変化する社会をリアルに、しかも共感度高く提示できる存在として生徒の前で輝くのだと思います。

安西 変化に対応する修正力とその土台となる軸があれば、人は達成感と挫折感を交互に味わいながら、自分の可能性を広げ続けることが出来ます。私は、幕末期と現代を比べて、似ていることが2つあると考えています。1つは急激にオープンカンントリーになっていくこと、そしてもう1つは、若い人にチャンスが広がっているということ。喜多埜さん

もおっしゃっている通り、私たちは「今、チャンスが広がっている」と若い世代にもっと知らせ、小さな挫折と達成を繰り返すことで軸と修正力を育む多様な場をつくっていかなければと思います。

山河 生徒は高校生活の中で様々な進路選択を行います。が、ややもするとその度に自分の進路が狭まってしまうようなイメージを持つことがあります。しかし実際には、授業で知識を身に付け、部活動や学校行事で様々な体験をし、異質なものと出合っていくことで、自分の可能性はむしろ広がっているはずなのです。自分の力を信じ、軸を大切にしながらも、自分を柔軟に修正して、多様なチャンスを生かすことが出来る若者を育てるために、私たちも高校の先生方と共にチャレンジを続けます。